

III

ハッカライネン講演と至民中実践研究

牧田 秀昭

1 はじめに

筆者は2008年度の都留文科大学の国際フォーラム¹⁾に参加し、そこで初めてハッカライネン夫妻²⁾の講演を聴いた。PISAで世界1の称号を与えられているフィンランドではあるが、必ずしも肯定的に受けとめているのではない旨を聞いて少なからず驚いた。その時の福井大学からの報告の一部として、教職大学院拠点校としての福井市至民中学校の取組を報告させていただいた。その報告にハッカライネン夫妻が興味を示されことも今回の来訪、来校の一因となったようである。

第2回公開研究会に合わせて来日され、特別ゲストとして、授業、シンポジウム等を参観し、講演会も実施された。講演会の中では至民中の実践研究の意味についても語られ、元気をもらおうと同時に、これからの方向性についても考えさせられた。本稿は、講演会³⁾を基にしながら、ハッカライネン夫妻が本校の実践をどのように捉え、筆者がどのように受けとめたかを記述すると同時に、そこから浮かび上がるこれからの時代の教師の力量について考察したものである。

2 2008年の都留文科大学での印象

筆者のフィンランド教育に関する知識は、PISA世界1位に関する幾つかの諸報道や文献によって紹介されたものから得たものであるが、特に印象に残っているものとしては、1位の要因として、佐藤(2007)が、リテラシー(言語を中心とする共通教養)に対する高い関心、平等な教育システム、教師教育の質の高さに大きくまとめている⁴⁾ことと、中嶋(2005)が紹介している、「差別・選別を廃した総合制教育の勝利である」というフィンランド教育者の提言⁵⁾である。

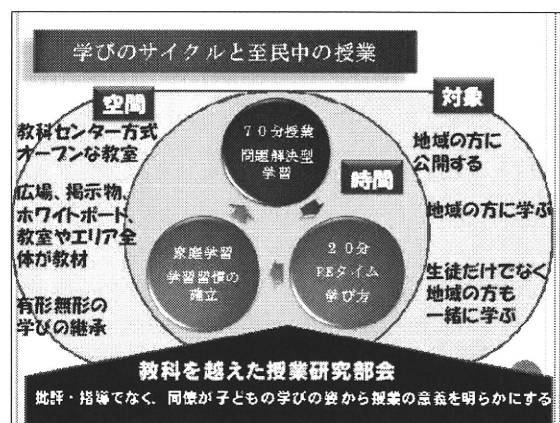
このような予備知識を持って前述の都留文科大学のフォーラムに参加した筆者は、報道されているようなPISAで1位になった原因を論説されるのかと想定していたので、誇るどころか、むしろ逆に子どもの学習意欲に大変な問題意識を持っていることが報告されて大変驚いた。子どもの学習意欲は低く、ドロッ

ブアウトの率も増加し、大きな問題だという。そしてナラティブな学習はそれを克服するものだという。

生活の中から問題を見つけ出し、子どもと教師が語りながら一緒に解決に向かうというナラティブラーニング、そして学生が子どもや保護者、地域に方と一緒に教育（保育）しながら学んでいく様子が紹介され、「開く」という意味の重要性を改めて感じ、至民中学校の取組との共通点を見た⁶⁾。中でも「答えが分からないことを若い世代に示し、一緒に考えていくことを進める必要がある」というミルダ・プレディクト氏の意見に賛同した。

ハッカライネン夫妻が至民中の第2回公開研究会にゲスト参加することが決まり、研究経過報告の骨子を、「開く」ことにスポットを当てて次のように構成した。前年度の第1回公開研究会は、同僚の山内教諭による数学の提案授業を私なりに解釈して、そこから至民中の授業の特徴、それを支える教師の協働のシステムと記録の重要性、生徒も教師も育つことの意味を提案した。2回目となる今回は具体的な1つの授業のことよりも、筆者が共通点と感じた「オープン性」に焦点を当て、日常的に行われていることを紹介しようとしたわけだ。具体的には次の通りである。

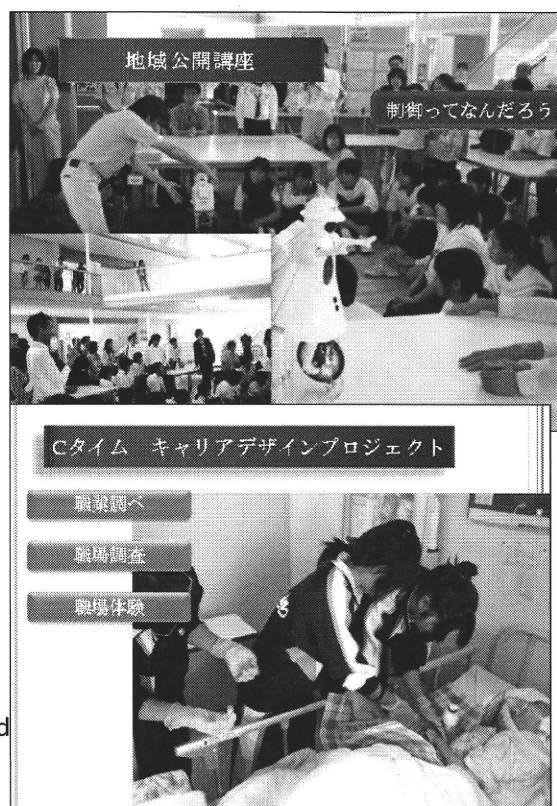
- ①至民中の不思議（校内研究会資料より）
- ②2005年からの至民中学校改革の歩み
- ③研究の過程で確認してきたこと（「学び舎」とは？ 中学校生活の目的とは？）
- ④新至民中の理念を実現する3本柱
- ⑤授業観の転換に挑戦
- ⑥地域公開講座の紹介
- ⑦開かれた学校生活（異学年クラスターの日常）
- ⑧Cタイム（異学年総合）のキャリアデザインプロジェクト（生き方学習）
- ⑨学校祭地域交流タイムの紹介
- ⑩至民中教育を特徴付けるもの
- ⑪学びと生活の融合という視点から見た教師像と力量形成



この中でも特徴的なものを紹介する。

⑤学びのサイクルと至民中の授業

授業改革が至民中の柱である。これまでも70分授業の問題解決型学習、20分のREタイム、そして家庭学習とのサイクル（探究・活用・習得のサイクル）を提案してきているが、この「時間」の運用に関するだけでなく、「空間」と「対象」も開くことが至民中の授業の特徴となっている。また、これらの取組を支えるものとして教科を越えた授業研究部会の存在がある。決して他の教師の授業を批評したり指導したりすることなく、同僚が子どもの学びの姿から授業の意義を明らかにしていく研究会である。教科センター方式を採りながら、ビジョンを共有できるシステムとなっている。



⑥地域公開講座

地域公開講座は、親子でそろって 70 分授業を体験する「親子で学ぶ 70 分授業」の地域への拡大版。2008 年度開校から 3 回目の開催。参観でなく、生徒たちと一緒に授業を受ける。技術の「制御って何だろう」は地元企業の紹介によって、ロボットも登場。「葉っぱの広場」全体を使って行われた授業で、2 階通路からの立ち見も出て、企業の方、保護者や地域の方入り乱れて、誰が教師なのか分からない。英語科の「いつか行くぞ海外旅行」は自分たちで決めた国についての資料を集め、オリジナルなパンフレットを作る。「フィンランド」も作成されていた。筆者が実施した「電卓名人への道」という数学科の実践も報告。電卓のいろいろな使い道は意外と知らない方が多い。昨年度もやり主婦たちに好評で、数学のアルゴリズムの思考方法が必要になる。社会科の「教科書では学べない歴史講座」では、地域の方が発言している貴重な写真を紹介。地域の方の学ぶ姿に自然と生徒たちも啓発される。その他に、小学生も一緒に学ぶ理科の浮力の実験や ALT や地域の方、小学生も一緒に学ぶ英語の授業の紹介もした。



至民中の授業では、生徒も保護者も地域の方も小学生も一緒に学ぶ機会を保証しているのである。

⑧C タイム（キャリアデザインプロジェクト）の紹介

1, 2 年合同の職場体験学習を柱とした、「生き方教育」で、職業調べ、職場調査（保護者の職場や訪問する職場について）、職場体験、ポスターセッション、論文作成という流れで進む。職場体験も、地域の事業所に随分お世話になった。どの学校でも行っていることではあるが、2 学年合同で行うことが本校の大きな特徴である。2 学年合同で行うことの意義が、2 年目になってより明らかになった。2 度目のサイクルは、経験の上での行動になり、立場的にも 1 年生という初心者を相手にして優位に立ち、見通しを持ってやり遂げることが可能になる。これは普段の生活にも言えることである。

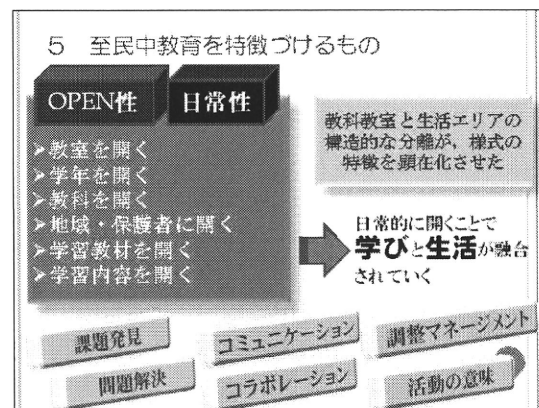
⑨地域交流タイム

今年度学校祭で初めて行った催し。学校の施設を最大限に使って、「至民アカデミー倶楽部」「ボランティアガイド」の方々が講師となり、「そば打ち体験」「フラワーアレンジメント」「ちぎり絵」など 14 のブースを設置。いずれかに参加する。講師だけで 60 名を超える方々が集まって下さった。学校が街角のような風景に変わり、学校の可能性を感じ取ることが出来た。担当である運営部会 A⁷⁾の高村教諭は、「講師の方々が、これまでのつながりの中で地域連携の趣旨を分かってくれている。いつも顔を合わせているから出来たこと。」と述懐している。



⑩至民中教育を特徴付けるもの

経過報告の総括に相当する部分の一部。教室、学年、教



科、地域、教材や内容を「開く」ことと、それらが特別な場合だけでなく「日常」行うことによって、学びと生活が融合されていくことを説明する。教科教室という学びの場とホームという生活の場が設計上切り離されていることも、それぞれの特徴を顕在化させる意味で重要であった。学びの生活も共に「課題発見」「コミュニケーション」「コラボレーション」「問題可決」などの力が必要とされる。また、共に「活動の意味」を捉え自覚することも共通であることを結論づける。

3 講演会「フィンランドの教育、そしてナラティブな学習」より

前述の研究経過報告、シンポジウム「(生徒たちによる)本音で語る至民中学校」⁸⁾、公開授業、授業研究会を参観された後、見出しの講演会となる。この章では講演会での発言を記載し、次の章で考察を加える(下線は筆者による)。

(1) PISA の結果から

PISA の結果から私たちが学ぶことは何か。昨年春フィンランドの評価委員会が過去3回の評価についての評価を出した。結果を注意深く見れば、数値的には言語の部分で落ちてきている。サイエンスは向上してきていると言える。しかし細かく分析してみても、PISA1位の原因はよく分からないのが現状である。

委員会の調査で、教師へ「次のステップには何が必要か」というインタビューをした。インタビューデータや観察データからは、子どもたちの発達が困難な状況が見てとれる。過去10年で特別な支援が必要な子どもの数が2倍になった。急激な増加率である。特別な支援が必要な子供たちと言っても、学習の面で困難を抱えている子が増えているのではなく、社会的に人間関係がうまく築けなかったり、コミュニティの文化に適応できない子どもが増えている実態がある。その点至民中は、地域と連携をとって社会にどうやって適応していくかを重視している実践だから非常に重要であると思う。

また、調査の中で、子供達のモチベーションの問題が大きいという指摘をしている(これはあまり数字に表れないが)。国際比較でフィンランドでは家庭学習に割く時間が少ないことが明らかになっている。なんと8%は全く家庭学習しないのである。

別の分析では、これから問われるべきは教師の実践の質、子どもの学びの質であり、どうやって一人一人に学ぶ意味を感じさせるかが重要な課題となっている。委員会でのこの指摘は10年前から私たちは取り組んでいることなので励みになる。

教師へのインタビューで、教師が日常的に抱える問題が出てきた。第1は、教えるべきコース、内容がきっちり決まってしまうに加えて、子どもの人数が増えてきていることが問題となっている。1クラスあたりの人数が多くなり、多くの子供たちを抱えながら、きっちりと教えるべきことが決まってい

ることが問題であるということである。次のような例がある。教師の伝統的な考え方として、効果的なベストな方法は本当に教えるのは1対1がいいという考え方があるのではないか。しかしそれに囚われてしまうと、実際はクラスの数が多いので、その理想的な考え方を捨てないといけなくなる(60分で30人なら1人2分になってしまう)。レベルも上位、下位様々(目に見える部分だけでなく、内面も)であることも問題である。1対1ならいいのにとする考えは捨てて、学級全体をどうしていいか、子供たち同士の関わりをどうしていいか、ということに考えを持っていかないといけなくなっている。それには教師の組織をどうしなければならないかということに繋がる。

モチベーションをどう上げていくかが重要で、その方法をどうするかということだが、フィンランドのシステムとしては存在していないのが現状である。教師はそのためにもどうすればいいのか、子供たちのモ

モチベーションを上げるための教師の力量は何か、が派生して生まれてくる問題である。そうでなければ教師の仕事は知識伝達になってしまう。私たちのナラティブアプローチは子供たちのモチベーションを上げる1つの方法として考えている。

モチベーションに関して言うなら、子供たちが落ち着かないといった、身体的に目に見えるものだけを言っているわけではない。行動に表れる問題は、心理的な問題とつながりがある（心理的な問題があると行動に出てくる）。これは幼いときから見受けられる現象である。フィンランドでは軍隊に入るテストに、心理的な問題と行動に現れる問題で10～20%は拒否される（入隊できない）という問題点が上がっている。

Challenges:

How can we manage with

- Demanding goals and growing classroom sizes?
- Growing disciplinary problems?
- Growing problems of wellbeing at school?
- Children's growing motivational problems
- Pressure to differentiate more teaching
- Pupil's postmodern life world
- Negative effects of social media on children
- Teachers feel they do not have time to do their work properly and they have to hurry up all the time

座ってられない、落ち着かない生徒の原因は何か、3000人の教師にインタビューした。85%の教師は、「その問題は教室の外にある。社会が変わってきていることに原因がある」と回答し、1%が「学校の中や授業にある」と回答している。多くの教師は、現状の問題は外の世界が変わってきてしまっているところにあると考えているわけだ。学校や授業自体には問題がない、教室の中には目を向けない、これが問題である。

最後の問題は、フィンランドの多くの教師が考えている。ちゃんとした仕事をしようと思っても時間がない、四六時中走り回っている、という声である。毎回の授業でおさえるべきことがきっちり決まっていて、それを律儀にこなしていくと、本当に教師として大切な仕事はことは何だろうと立ち止まって考える余裕もない。これがストレスやプレッシャーとなり、ピサシンドロームとも呼べる。

ミルダ・ブレディクト氏のコメント：PISAのネガティブな影響は・・・一般の人の多くは、良い結果に対して良いと思っているし、教育関係者の半分は良かったという感想を持っているが、私は怖いことと考えている。この結果を手放して喜んでいては、教師にとって何が一番大切か、核なのか、という「質」が変わられていくと思う。子供たちの個性を大切に育てていくことから、トレーニングに形を変えてしまう気がする。例えば自分の子どもが、5年生の算数のテストを家に持ち帰り、こんなテストだと話してくれて、良い結果だと思っても、私自身が子どもの時には経験してこなかったことである。単に慣れていないというだけのこと。今の子供たちはテスト慣れしていて、学校での経験が、私たちの時代とは変わってきている（補足だが、ミルダはフィンランド出身ではないが。）。私が教えている学生にも変化がある。教師になりたい情熱や、こんな授業をしてみたいという創造性にあふれている学生が減ってきている。年々やる気のない学生が増えてきているのだ。おそらく、彼らの、教員のプロフェッショナル（専門家）としてのイメージが変わってきているからだろう。それは彼らが子ども時代から受けている経験の質が変わってきているからだろう。（PISAの良い効果があったとすれば観光客が増えたことだろうか。）

(2) 至民中への評価

最初に至民中で学んだことは、セミオテックス（数学用語、空間の機能）が人の活動やコミュニケーション、学びの交流にどう影響を与えるか、ということ。伝統的な学校、伝統的な学びのinteractionとは違ってくる。2点目は、学ぶときのグループ、どういう形で学ぶかということだが、全体や小グループなど

いろいろ採り入れている。フィンランドは個人主義が強調されていて、それが評価にも直結している。グループ全体でどうかというところへいかない。至民は学びのコミュニティとしてどう組織しているかというところで学ぶべきところが多い。

先生方が焦点を合わせて大事にしていることにも学ぶべきものがある、どのように子どもが関わりながら学んでいるか、他の子どもを考慮に入れながらも個々の子どもがどのように学んでいるかに視点を置くことを大事にしている。コントロールなのかサポートなのか、教師の役割は何だろうか考えさせてくれた。どうやってサポートしているかということを考えている。昨日の分科会でも、子供たちがどう支え合っているかを語っている。おそらく全体もそうなのだろう。

至民中では、教師同士が支援し合い、学び合っている。しかしフィンランドでは難しい。授業を同僚に開いてそれに基づいて話をすることは、教師がお互いに支え合う重要な大切な方法である。授業を開くことの意味においても、参観している人はそこで行われていることを自分のものと重ね併せて見たり、こういう考えもあるのかと違う角度で見たりということもできる。

子ども同士の学び合いを大切にしている。大人の考えとしては間違っていたら正しい方へ導きがちだが、いかに違ういろんな考えを引き出すか、子供たち同士で学んでいけるかを大切にしている。

異学年での交流もとても良い実践。上級生と下級生の関わりは、教師と子どもの関わりとは違う。同じ内容でも伝える性質が違う。教師対生徒ではコミュニケーションに序列、権限がどうしても出来る。教師は権力を持っている。ナラティブアプローチでは教師の権限はない。序列もつかない。教師も学びの中の1つの役割を担う。「権限抜きで子供達と一緒に」これがナラティブアプローチ。

至民中が実践している、コミュニティと協働しながら学ぶということのよさは、活動に「ここまでやればいい」という制限がないこと。無限の広がりを感じさせる。限界があるとしたら教師のイマジネーションの限界が来るときである。

(3) future school・・・教師の力量とは

Obligatory changes in “Future school”

- Values of the future world and our responsibility
(President Tarja Halonen: “We have to change our values, life styles thinking, there is no return back to old world”)
- Respect of human value of the child (Lack of knowledge and skills is no reason for humiliating the child)-self identity
- Teachers as partners and supporters
- Educating and teaching by arousing children’s motivation –children have to change their own life and take responsibility

私が問題提起したいことは、今から20年後社会はどうなっているかということである。価値観、生活様式、考え方を変えないといけない。社会は過去に戻らない。そして、世界中が直面している問題は学校の問題に通じていると言える。

未来の学校にとって、教師にとって必要な力量は、テクノロジーによって解決できるような問題ではない（役に

立たないのではなく十分ではないということ）。教師の力量として、未来の学校へ向けて変えていくプロセスとして、教師がキーパーソンとなっている。どう変えていくか、それを子供たちと一緒に考えていくことが大切だ。

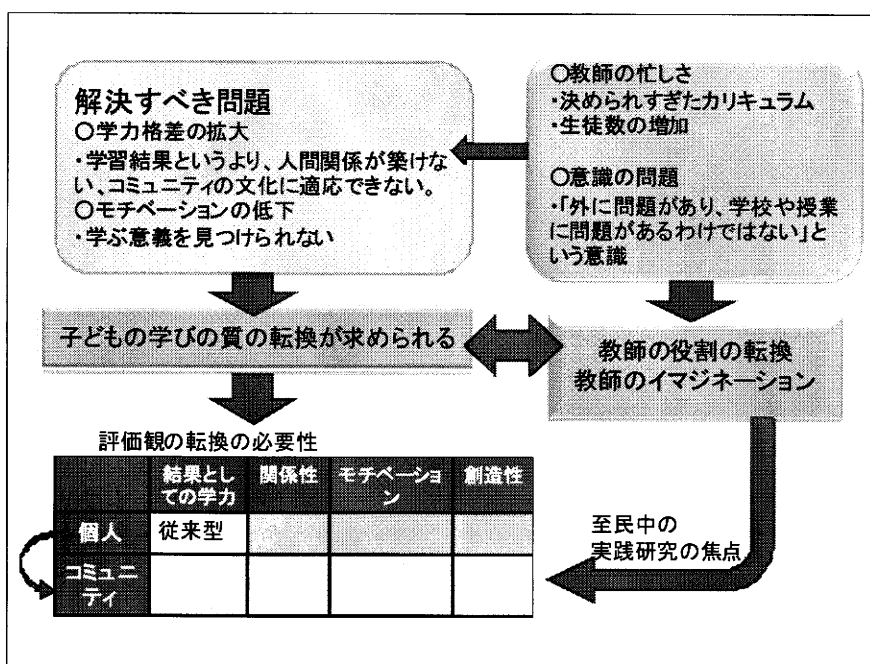
最後のポイントは、子供たちのモチベーションを高めながらどうやって学ばせていくかということである。子供たち自身が自分たちの生活を変えていかないといけない、自分たち自身で責任を取っていかないといけない。従って、これからの教師に必要な力量として、子供たちがどう変えていくか、どう責任を取っていかをどうサポートしていけるかが挙げられる。教師自身が子供たちの生活を変えていくことを取って代わることは出来ないのであるから。やっていくのは子どもたち自身であるから。

知識を伝達するだけでなく、子供たちがどうやってこれからの未来に向かってモチベーションを高めていくか、これからの教師に問われる問題である。

ミルダ・プレディクト氏のコメント：教師が良いモデルになって、教師自身が自分たちを変えていく、その責任を持つモデルになることが大事。そういう意味で、学校はチャレンジングな大変な場所だが、大人にとっても成長できるチャンスの場とも言えるだろう。例えば至民中の建物に入って「これは今までと違うな」と感じ、自分たちを変えていかないといけないことが生じるだろう。学校は子どもにとっても大人にとっても、変わるチャンス場なのである。

4 読み取り

この講演を私なりにまとめると下図のようになる。



PISA で 1 位になりながらも、ハッカライネン氏が考える解決すべき重要な問題は、特別に支援が必要な生徒が増えているという学力格差の問題であり、学ぶ意義を見つけれないモチベーション低下の問題である。そのために子どもの学びの質の転換が図られることが必要である。具体的には、結果としての学力だけでなく、関係性やモチベーション、創造性など、プロセスにおける価値付けをしていくことが求められる。また、個人主義だけでなく、コミュニティとしての学力を評価していくこと

も必要である。これらの転換には教師自身が変わらねばならない。教授者としてだけでなく、パートナーやサポーターとしての役割を担ったり、生徒以上のイマジネーションを発揮したりすることである。しかし教師の現状は、生徒増や余りにも教えるべきことが詳細に決められていることで多忙感、ストレスを感じ、加えて、問題の原因は学校の外にあり教室や授業には問題がないという、責任転嫁が行われていることが大きな問題点である。

これに対して至民中で提案している内容は、問題の要因を内にあるものとし、学校として実現できる可能性を探る姿として捉えられたと考えられる。個人の問題としてだけでなく、授業、および日常生活において様々な学びのコミュニティを組織し、その中での関わりを重視している。結果として教師の役割も変化しており、教師同士の学び合いも起きている、という位置づけである。

5 今後の至民中の実践研究に求められるもの

(1) カリキュラムの再構築

至民中は「オープン性」と「日常性」を謳い、日々実践研究を続けているのであるが、本当に機能しているのか見つめ直す必要がある。70分授業と20分REタイム、そして家庭学習も巻き込んだ「探究・活用・習得」の学習サイクルの構築が本当に実現できているだろうか。ここでは2点について言及したい。

1点目は、「カリキュラムの再構築」についてである。本校のカリキュラムは、単なる単元配列表と配当時間計画でなく、学習課題、生徒活動も含んだものと捉えている⁹⁾。しかし一旦作成されてしまうとなかなか更新できないのが実状である。すると教師の創造性が発揮されない。70分授業を開始(2006年度)した当初は、どこで生徒活動を採り入れようか、毎日の教材研究には苦労を重ねた。行われた授業は、ベテラン教師であっても辿々しいものが多かった。しかしその時の授業はどれも生きていたと思う。移転開校した2008年度も、これまで体験したことのないオープンな空間で、毎日いろいろなチャレンジが試みられた。その内の大多数が非効率的で場当たりの(その時、その場で場所や環境の利用を考える)なものであったかもしれないが、こちらも同様に授業は生きていた。生徒も教師も、毎日が「学びの旅」の連続だったのだ。2年目の今年度は1年間で見通しが立ち、70分授業にも慣れて、どちらかというとなんとなく無難にこなしているという感がある。今ここでもう一度「カリキュラムの創造と更新」の重要性を認識することが求められる。1つの授業についてのこと、単元全体についてのことを、3年間を見通して構築していかなければならない。

ハッカライネン夫妻の講演から考えるカリキュラムにはこれまでも増して、学習内容に関するものの他に、次のことが明らかにされている必要がある。

①単元を貫く中心課題

単元の目標となるものが掲げられていなければならぬ。しかも具体的でなくてはならない。内容的なことだけでなく、社会人として生き抜くための、人としての成長を教師も生徒も意識できるものが望ましい。ベテランになればなるほど指導内容のことばかりが念頭にあり、効率を求め、「人としての成長」¹⁰⁾という概念が喪失されてしまう。この視点を意識して組み込むことが必要である。

②中心課題から派生する活動可能な授業課題の設定

単元全体を貫く中心課題だけでは授業は成立しない。授業場面で活動可能な課題を設定する必要がある。至民中の「問題解決型学習」は教師の投げかける課題に対して試行錯誤し、解決すべき問題意識を持って取り組むところに焦点が当てられている。一問一答式や教師の用意した答えを当てる様な形式では問題意識が芽生えることはないので、課題の提示の仕方を工夫することが求められる。

③「人」「環境」との関わり

学びは人や環境との関わりによって深められる。授業の中で、協働の組織をどのように構築するのかを示しておくことが必要である。「日本人は協働ができる」とハッカライネン氏は述べているが、仕組みを整備しておかなくては、いつでも出来るものではない。どのような「対話」を組織するかを明らかにしておきたい。踏み込んで、教科や場面によっては異学年の生徒たちが学び合うこと、地域の方々と学び合うことも視野に入りたい。また、「人」だけでなく、「環境」との関わりも重要である。実生活から資料を収集することや、教科センター方式の環境を用いることなどをカリキュラムの中に組み込み込んでいくことが求められる。

④「作品」に関すること

学びの結果だけでなく、過程を重視するとなると、学びの進み方が可視化できるとよい。生徒たちにと

っても目標となり、自分のものとして大切に感じることになるだろう。したがってカリキュラムには具体的に作り出す「作品」を明記していくことも重要である。個人でのレポートや新聞、グループでのポスターや紙芝居等様々なプレゼンテーション材は、その時の授業だけでなく、教科エリアに展示することによって下の学年の生徒にとっては内容の見通しや目標に繋がり、上級生にとっては長いスパンでの振り返りとなり、間接的な関わりを促進する。教科センター方式の利点を最大限に使うことにもなるだろう。

⑤習得に対する方策

探究的な授業の中で知識を習得していくことが望まれるが、現実問題としてうまくいかない。フィンランドでは家庭学習時間の少なさが問題点として挙げられていたが、本校でも全く同じ悩みがある。そのために70分授業のみならず、それを補完する形での20分REタイムが組織され、家庭学習につなげようとしているのである。習得には、リアルタイムで授業に応じて進められる家庭学習と、重複の度合いを考えながら毎日規則正しく進める家庭学習の2種類が必要である。もちろんこれらの必要性について生徒が実感していることが必要条件であり、逆に言うなら実感させる授業の構造が無くてはならないのである。この2種類の習得のための方策をカリキュラムに組み込むべきであろう。

さて、これらのことを含めたカリキュラムを創造するとなると、教材への深い造詣が必要となる。これには徹底的な教材研究が必要なわけだが、「教材研究」が単なる「教授方法の理解」として一般的に用いられているように感じる。教材や方法などはWeb上にあふれるほど紹介されており、それを検索するだけで満足してしまう現状がある。徹底的な教材研究によって、「教材観」が育まれ、教師としての力量形成に繋がるのであるが、教材研究の仕方については別に機会に記したい。

(2)教師の、授業についての語らい

至民中では、子どもの学びの姿を基にして授業を語ることを続けてきている。一斉に研究会を持つ時間が無いことが多いので、「参観記録」¹¹⁾を書くことでも、学びの筋を見取することを学んできた。

しかし、前章でハッカライネン講演読み取りにも記述したように、従来の個人の結果としての学力（定着の度合いや定着までの過程）だけでなく、コミュニティとしての学びはどうか、そして、個人としてもコミュニティとしても、モチベーションや関係性、創造性がどのように培われているのか、についても意識して語っていくことが必要になるだろう。

平成22年1月19日に本校の校内研究会で行われた公開授業（中学2年英語）と授業研究会では、この語りの一端が見えた。1つの授業の中で、教師対生徒個人、教師対コミュニティ、コミュニティの中の生徒個人対生徒個人、コミュニティ対コミュニティといった、様々なコミュニケーションが見られた授業であったことも授業研究会を活性化させた（英語のコミュニケーションを基盤とした総合的な授業であったから、様々なコミュニケーションが授業の目的そのものでもあった）。それぞれの教師が1人の生徒、1つのグループの学びの姿を追い、小グループになって観察した内容を報告し合い、全体に報告するという形式の授業研究会を行った。どの生徒も学習への参加意欲が高く、教師の問いかけや同じグループの生徒との相談、他のグループの発表を聞くことによって、作品としての英作文の質が向上していくことが報告された。また、学習の習熟度が低く、他教科では学びを放棄しているような生徒も、他の生徒と関わりながら学んでいる姿も報告された。必然的に、次はそれらの学びが成立した条件を教師同士で語り合うことになる。

そこでの協議では、奇しくもこの章の前項に著したカリキュラムに関する項目が表出された。すなわち、単元全体を通して形容詞や副詞の比較表現やThere is～といった構文を用いることで、より思いを表現で

きるようになるという、英語を用いる社会人としての成長という観点からの大きな目標が設定されている。さらに授業では、「来日して間もないALTとその友達に福井の名所を紹介しよう。どこへ行くように勧めるか。」という明確な学習課題が提示された（これからの実生活でも起こりえることだということも生徒たちには理解された）。紹介する場所は生徒の興味関心によって決められ、同じ場所を選んだ生徒によって10カ所にグルーピングされる（あくまで興味優先で、グループの人数に偏りがあるのがその証拠である）。教室の周囲に点在する10枚のホワイトボードには幾つかの写真が貼られ、そこからイメージして英訳する活動になっている。少々の誤りを恥ずかしがったり気にかけたりするより、自分たちの思いを表明しようという意欲が勝っているわけだ。結果的に残された彼らの作品の中にある幾つかの誤りについても、すぐに直してしまうのではなく、生徒たちの問題として返していく方法が幾つか提案された。生徒たちの目線に立った課題設定のよさと、コミュニティの組織の工夫が生んだ見事な授業であったことが小グループから報告が為された。ハッカライネン氏は「問題解決場面では、子どもは大人の論理（客観性）は使えない。問題は大人に対して外に存在するが子どもには自分の問題として内に存在する(*inside problem*)」と述べていたが、正に生徒たち自身の問題になっていたと言えよう。教師の役割としても、積極的に例示をしていくのではなく、生徒活動のサポートに徹していた。活動のプロセスがホワイトボードに可視化されていることから、教師やALTがアドバイスしやすい仕組みにもなっている。なにより教師自身が、授業を、生徒たちの作品を楽しんでいた。これが生徒たちに伝わるのである。ハッカライネン氏の強調する[*future learning potential*]が具体的に語られたひとときであった。

いつでもこのような語らいが出来るわけではない。しかし参加した教師たちは、授業者も参観者も、管理職も新米も、学生も講師も、英語科も他教科も皆、充実した表情を浮かべていた。普段の授業の見方や語らい方の研修が具現化されたこの経験は、参加者にとって、必ず次のカリキュラム構成や授業研究会に活かされるであろう。

6 これから求められる教師の力量とは

これからの子どもに必要な力は、当然教師にも必要である。ハッカライネン氏の「限界があるとしたら教師のイマジネーションの限界が来るとき」という言葉にも表れている。すなわち、教師にとっても生徒と同様に、結果として個人に蓄えられていくような資質や能力だけでなく、コミュニティとして捉えることや、それぞれについて、関わり、モチベーション、そして創造性について考え直して見る必要があるだろう。

生徒の評価観の転換に対応させて、これからの教師に必要な力量についてまとめたのが次の表である。どんなモチベーションや関わり方、そして創造性が必要かということである。ベテラン教師と新米教師の力量の違いはなかなか言葉では表現できず、あえて表現しようとすれば指導方法の種類や数の豊富さの差でしか語られてこなかった。しかし、それは教師の力量の一部であることがわかるであろう。この表にあるものは順序性がつくものではなく、それぞれ行きつ戻りつして高まり合っていくものと考えられる。

さらに、これらの力量形成は他に求めるのではなく、自分の学校の中で実現していくこと、そのシステムを構築することが重要なのである。それでこそミルダ氏が言う「子どもにとっても大人にとっても成長できるチャンス場」となるような学校が実現するであろう。

どうやって学校内部でこれらの力量形成が為されるのか、引き続き次回、言及していきたい。

	結果としての 資質能力	関係性	モチベーション	創造性
教師個人	<ul style="list-style-type: none"> ・教科の知識や教授方法を増やすこと ・問題対処方法の知識を増やし技能を向上させること ・子どもや保護者との様々な接し方を知ること 【伝統的な資質・能力】	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら新たな知識や技能を求めていくこと ・教室を開き他者の目を入れ声を拾うこと ・自らコミュニティを築いていくこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師としてのやりがいを感じる、見出すこと ・なりたい教師像を確立すること 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容から自分の力でカリキュラムを構築できること ・前年度の自分の実践を超える構想力を持つこと ・状況に応じて受難な判断や対応ができること
コミュニティとしての教師集団	<ul style="list-style-type: none"> ・各自が校務分掌等の責任を果たしたり、カバーし合ったりして、コミュニティとして良好に機能すること ・コミュニティとして社会の中で役割を担い、任される存在になること 	<ul style="list-style-type: none"> ・今のコミュニティの価値を他との関係で把握できること ・他のコミュニティ(学年や立場の違いも含む)との関係を把握し、コミュニティ同士の新たな関係を構築できること 	<ul style="list-style-type: none"> ・同僚と語り合い、ビジョンを共有することや、コミュニティが個人に与える影響といった、コミュニティの存在意義や価値を感じ取れること 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティの中での語らいの中で、新たな課題や解決方法を構築できること ・コミュニティとして、状況に応じた柔軟な判断や対応ができること ・これからのコミュニティの在り方、方向性を決定していけること

1) 都留文科大学第2回特色GPフォーラム「地域を基盤にした教師教育改革ーフィンランドと日本」が2008年11月8日、9日に開催された。1日目基調講演「ナラティブラーニングと教師教育(オウル大学副学長ペンティ・ハッカライネン)」, 2日目には福井大学からの報告「「学びの共同体づくりと「教職大学院」の発足(寺岡英男)」, 都留文科大学からの報告がなされた。

2) ペンティ・ハッカライネン氏: フィンランド, オウル大学副学長, 教師教育学部教授。ヴィゴツキーの流れを汲む教育心理学, 早期教育の研究者。夫人のミルダ・プレディクト氏はオウル大学講師。

3) 第2回至民中公開研究会および国際フォーラム(2009.10.23~24)での講演。タイトルは「フィンランドの教育, そしてナラティブな学習」。通訳は北田佳子氏(当時福井大学教育地域科学部, 現在富山大学人間発達科学部)によるもので, 本稿もこのときの通訳に則って記述されている。

4) オッリペッカ・ネイノネン, 佐藤学『「学力世界一」がもたらすもの』NHK出版, (2007)

5) 中嶋博「差別・選別を廃し総合制学校を そして未来へ」庄井良信, 中嶋博編著『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店, (2005)p.333

この中で, 成功の要因として, 次の11か条を挙げているので紹介する。

- ・居住地, 性別, 経済的状況や後刻後の如何を問わず教育に平等の機会
- ・地方での教育の接近性
- ・性差別の皆無
- ・教育が総体的に無償
- ・総合的・非選別的な基礎教育
- ・支援的で柔軟な管理(全体の中央集権的助言と地方での実施)
- ・すべてのレベルにおける課業の相互関連的協同的方法
- ・学習への個人的支援と生徒の福祉
- ・発達志向評価と生徒の自己評価(テストもなく序列テストもない)

- ・高度の資質を備えた主体的教師
- ・社会構成主義学習概念

6) 牧田秀昭「「開く」ことに関する「質の転換」」『教職大学院 Newsletter No.8』p.7 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(2008)

7) 至民中学校は、授業研究部会の他に、全員参加の運営部会が ABC の 3 部会ある。A は地域連携, B は生活設計(クラスターでの日常を考える), C は C タイム運営で、全員が重要な学校運営に直接関わるシステムになっている。

8) 公開研究会では公開授業や授業研究会だけでなく、全体会が行われるのが常である。2008 年度の第 1 回公開研究会の全体会では、研究経過報告の後、鼎談『新至民中学校で 21 世紀の中学校教育をデザインする』を行った。しかしそこには生徒の姿はない。第 2 回公開研究会では、生徒の生の声で、至民中の普通の教育を語ることが企画した。研究会そのものの在り方も発信し続けようと考えている。

9) 牧田秀昭「確かな学力と豊かな心の育成」『福井市至民中学校平成 19 年度研究紀要』p.5

『時系列で単元毎に 1 つの枠でまとめ、何時間かけて、生徒がどんな活動をしてきたか(あるいは来年度させようとしているか)をなるべく具体的に示す。必要に応じて、中心と夏課題、学習活動、単元全体の大きな流れだけでなく、培いたい力や目的なども書き入れる。(中略)授業は生き物である。「授業者の揺るぎなさ」が逆に授業を形骸化させる。授業と同時にこのカリキュラムも動き続ける。』

これは佐藤学「学びの文化的領域」佐伯胖 藤田英典 佐藤学『学への誘い』東京大学出版会(1995)pp. 143-144 を参考にした。当時の校内研究会では、この部分を職員全体で読み共通理解を図った。

『しかし、ひるがえって、「カリキュラム」とはなにを意味しているのだろうか。わが国において「カリキュラム」は、教科と教材を学年別に組織した所与の「制度的枠組み」として意識され、教師と子供の実践領域においては死語となっている。もちろん、この用語を使用する教師もいないわけではないが、その「カリキュラム」とは「教育計画」や「プログラム」や「時間割」を意味しており、日常の実践の内側に位置する言葉ではない。日本の学校の「カリキュラム」は、どこまでも制度的な概念であり、授業や学習に先だって決められた「計画」を意味していて、日々の授業と学習を構想し創造し反省するいとなみに内在する概念ではないのである。ところが「制度的枠組み」という意味も「教育計画」という意味も、「カリキュラム」の意味の一面しか表現しておらず、この概念の本質的な意味を表現しているわけではない。「カリキュラム」は、ラテン語の「走路(currere)」を語源とし「人生の履歴(経験)」という意味で使用されてきた言葉であり、その語源に即して理解すると、教育用語の「カリキュラム」は、「学びの履歴(経験)」と定義するのが妥当だからである。事実、英米における「カリキュラム」は、教科や教材やプログラムや計画を意味する場合もあるが、中心的には「学びの経験の総体」を意味する概念であり、子供の学びの経験の文化的内容をさす言葉として使用されている。』

10) 今年度、これまで校内で語ってきた授業の在り方を、教師が自己評価する項目として「より豊かな学び、より氏つん高い問題解決型学習にするために」として次の 10 項目にまとめた。この「人としての成長」は第 10 項に当てはまる。

より豊かな学び、より質の高い問題解決型学習にするために

- ① 教師の声のトーンが上がりすぎていないか？
- ② 教師が話しすぎていないか？
- ③ 話を繰り返していないか？
- ④ 子どもの実際より先走っていないか？
- ⑤ 学習課題のレベルが下がっていないか？
- ⑥ 肝心な場面でスモールステップになっていないか？
- ⑦ 教師の準備した「正解」を当てるような授業になっていないか？
- ⑧ 生徒が時間をかけて創りだしたものを無駄にしてはいないか？
- ⑨ 結局はテストの点数だけを最重視していないか？
- ⑩ 「この単元(授業)でどんな成長をさせたいか」というビジョンが明確か？

第10回校内全体研究会資料より

- 11) 牧田秀昭「学校に時間をデザインする」しみん教育研究会『建築が教育を変える』鹿島出版会
(2009)pp. 118-119

